

奴隸制即時廢止主義の思想的展開

清水忠重

Summary

The Meaning of Abolitionists' "Immediatism"

Tadashige Shimizu

This paper seeks to grasp the meaning of abolitionists' "immediatism," which was based on the doctrine of the "immediate and unconditional emancipation" in the ante-bellum slavery controversy.

The features of immediatism in one's understanding of the character of southern slavery can be made clear when they are contrasted with those of gradualism. And the doctrine of gradualism may be classified into the three following definite types. The first type is one that represents slavery not as a sin but a calamity which has no relationship with human intentions. Here the problem is kept out of the moral domain and slavery is regarded as an amoral thing. The second type is one that admits the monstrous injustice of the "origin" of slavery, but at the same time makes an apology for the "continuance" of the existing institution. It is often affirmed here that "the original sin" of capturing slaves in Africa and bringing them to America belongs to England and that the slavery has been just entailed upon the present southerners by former generations. The third type is one that denies the "continuance" as well as the "origin" of slavery, but forgives the sin of southern slave-holders. Though the institution of slavery is regarded as atrocious and cruel, the southerners are seen to be kind, innocent and warm-hearted.

The immediatists' stand-point is totally against gradualists' assertions. For the immediatists, slavery is not an economic and political institution, but a subjective and moral problem; it is not a mere physical evil but a moral evil for which man should repent instantly. While the gradualists content themselves with denunciations of the institution and with excuses for the sinner "as a creature of circumstances, the victim of ancestral transgressions," the immediatists accept no excuses of the southerners and try to identify the individual criminal. The strong inclination toward individual moralism and personal criticism together with severe invectives constitute the distinguishing features of the abolitionists of this category.

はじめに

一八三〇年代の奴隷制^{アメリカ合衆国}廃止運動をみちびいた即時主義のスローガン（いわゆる「即時無条件解放」あるいは「即時全面解放」の主張）は普通、W・L・ガリソンの『リベレーター』創刊号（一八三二年一月一日）にその起点が求められる¹。しかし即時主義の思想を系譜的に跡づけようとする場合、その先駆性と急進性からいって『リベレーター』紙に十数年先行するG・バーンの労作『聖書と奴隷制は両立せず』（一八一六）の意義と役割りを看過することはできない。バーンのこの著作は南北地域間対立のいまだ激化していなかったミズーリ協定の数年前に上梓されたものであるにもかかわらず、即時主義思想の原理的枠組があらかたそこに打ち出されているという点で、きわめて興味をひくものがある。

本稿ではまずバーンのこの一八一〇年代の著作を通して即時主義のドグマの登場してくる歴史的背景と、このドグマのもつ意味合いを概観し、ついで一八三〇年代アポリシヨニスト——とりわけガリソンとA・A・フェルプス——によるその後の思想的な展開過程をあとづけ、即時思想の特徴、漸進主義批判の論拠、即時主義のはらむディレンマといった点に論及したい。

G・バーンは一七八〇年イングランドのウェストバリに生まれ、ロ

ンドンのホマートン神学校で教育を受けたのちアメリカに移住、一八一四年にヴァージニア州サウスリヴァーで長老派の牧師になっている。奴隷制の即時全面廃止を唱えて南部宗教界の異端児となったかれは北部に移り住んで奴隷制告発の著述活動をつづけ、一八三三年フィラデルフィアにおけるアメリカ奴隷制反対協会の結成集会にも参加している。本稿でとりあげるバーンの主著『聖書と奴隷制は両立せず』（一八一六）は、相反する方向づけをもった潮流が相殺しあって地域間対立が一見糊塗されたような外観を呈していたいわゆる「好感情の時代」（一八一七—一五）の直前に公刊されたものである。建国期以来の奴隷制反対の気運はすでに奴隷貿易の禁止（一八〇七）を実現していたが、奴隷制の強化をもくろむ傾向も南部には芽生えはじめていた。バーンの著作が出たのと同じ一八一六年末にはアメリカ植民協会が創設されているが、この協会たるや奴隷制という根本課題は最初からわきに置き去って、自由ニグロという夾雑物の除去にのみ専念し、そうした皮相なレヴェルに地域間協調をとりつけようとする点で、いわば来たるべき好感情時代の精神を体現していたといえる。

奴隷制をめぐるこの時代の欺瞞的な雰囲気、バーンは『聖書と奴隷制は両立せず』の中でくりかえし批判している。矛盾はすでに「一方の手で独立宣言に署名し、他方の手で怯える奴隷に鞭を振りまわす」建国の父祖たちの態度の中に胚胎していた。そして十九世紀初頭にはすでに奴隷制弁明の心理と論理が広くゆきわたるようになっていた。そのひとつはたとえば「コンゴにおけるニグロ略奪の恐怖感、その悪業がなされる距離の隔たりによって和らげられる」とでも表現しうるもので、凶

悪な犯罪（奴隷狩り）の現場（アフリカ西海岸）からの隔たりのうちに漠たる安心感を見出そうとする心理である。バーンはこれに次のような批判を放っている。「赤道付近では極悪の事柄が、温帯では潔白無罪たりうるのであらうか。東経百度では不正の極みといふべきものが、東経一度では公正となりうるのであらうか。自分のまわりに生まれる子供をすべて、生まれた瞬間からわが物として所有する者は、コンゴを急襲して船の積荷を誘拐するのと原理的には同じことではないのか」（傍点原文イタリック、以下同様）。

距離にもたれかかるこの心理と並んで、奴隷制の道義的責任を前の世代へと順次先送りし、奴隷制導入の咎を結局イギリスに帰すという方法もよく用いられた。奴隷制はほんらいアメリカ人の意に反して外国の専制権力によって押しつけられたものであり、現世代の南部人はたんにこれを父祖の世代から相続したたに過ぎないという言い分である。バーンはこれに対して、両親を盗めばそこから生まれてくるすべての世代にわたって息子と娘を盗む権利が生じるとでもいうのかと反論しているが、道義責任を時間の彼方に追いやって罪の解消をやむやうのうちに図ろうとするこの種の言い草は、イギリス「原罪」説——「アフリカで奴隷を捕獲し、ここに連れてきた原罪はイギリスにある」という論法——として、これいご再三繰り返されることになる。

宗教界の態度もバーンの眼にはきわめて曖昧なものに映った。福音を説くかたわらニグロ売買に手を染める奴隷商人のような牧師は論外として、一般に聖職者たちは奴隷制を公明正大なものとして鼓舞激励するでもなく、逆に正面切って批判に付すでもなく、ただただ無関心と冷淡を

装うのを常とした。当時の宗教界の代表的見解のひとつを、バーンは次のように紹介している。すなわち、聖職者たちは「キリストとその使徒および福音書の著者たちの（奴隷制に関する——著者）沈黙を楯にとつて、奴隷所有者が当時罪深いものとはみなされていなかったことの証左であると主張している。そしてかれらは、新約聖書は本意の隷属を命じていなければ否認してもいいないと主張している」というもので、奴隷制を肯定するでもなく否定するでもないこのどっちつかずの立場は、時代の曖昧な空気をそのまま反映するものであったといえよう。

バーンはまた当時の代表的論客の一人である聖職者S・S・スミスの所論をかなり詳細に取り上げて論評している。次に引くのはスミスの言葉である。

奴隷制はなんらかの根拠にもとづいて、正義と人道の自然法に合致しているであろうか。奴隷制は正義にも人道にもともに反している。アフリカ奴隷貿易はどの点をとってみても、いかなる時代、いかなる国民もかつて犯さなかったような正義と人道の極悪非道な侵害である。これを正当化しようとしてなされる偽善的言い訳は、奴隷貿易の非人道性と同様、厚顔無恥なるまいである。ひとは自分に都合のよい奴隷制を正当化するために、偽りの口実によって絶えまなく自らを欺き続けるのである。¹¹

この正論に対しては、バーンも当然異論はない。しかしスミスはここで急転直下論法をかえ、右にすぐ続けて「その起源において不正であった奴隷制は、その存続においても等しく不正なのであらうか」と問い糺し、奴隷制の出発点は罪に染まっているかも知れないが、その維持・存続はあたかも不正ではないかのような口ぶりへと突然切りかわ

る。そして、たとえ正義・人道の見地に立つといえど、罪もない現在の奴隷主から奴隷財産を奪いさるの理不尽というものであり、現下の奴隷制の温和な形態と奴隷に施されている優遇等にかんがみて、この制度の維持・温存はなんら疚しいことではないという結論へと至る。¹² バーンはこのスミスの論法に次のような揶揄をまたもや繰りかえしている。「盗みはアフリカでは極悪非道な事柄なのだが、アメリカでは潔白無罪なのである。誘拐はゴールド・コーストではこの上ない悪魔的蛮行なのだが、アメリカではひとがこの大罪を犯すのを思いとどまらせようとするこのほうが残忍だとされるのである」。¹³

十九世紀初頭の奴隷制論の特徴を要約しておこう。奴隷制論争は一八三〇年代以後になると奴隷制擁護論と即時無条件廃止論を両極とする形に明確に分岐していくことになるが、バーンの時代には南部北部を問わず、奴隷制を「積極的善」として正当化したり、逆に人倫に背く大罪として全面否定したりするのではなく、むしろこれを道徳的なもの、人間の善意・悪意を越えたもの、あるいは個人倫理とは無関係なものとして——後段でとりあげるA・A・フェルプスの用いる語法を先取りして使えば一種の「自然災害」として——位置づけようとする雰囲気支配的であった。宗教界が「奴隷制にかなする新約聖書の沈黙」¹⁴を好んで持ちだしたのも、この時代感情を端的に反映したものであった。そして奴隷制論に道義的観点を持ち込まれることもあるにはあったが、その時には距離の隔たりで罪悪感を薄めたり、イギリスの「原罪」をもちだしたり、よりソフィステイケートされたスミスの論法が装われたりしたわけで、これらはニグロ捕獲（起源）の犯罪性を認め罪意識をなかなば引き

ずりつつも、そのかたわら奴隷制「存続」の正当性を説くという点で、つまりその曖昧さ、歯切れの悪さの点で、これまたこの期の代表的論法であったといつてよい。バーンがくりかえし告発したのはこうした環境還元論的発想でもって罪意識を稀薄化し、個人の道義責任をなし崩しに解消してしまおうとする欺瞞的風潮に他ならなかった。

バーンの奴隷制反対の論拠と即時主義の精神について一、二付言しておこう。バーンは『旧約聖書』『出エジプト記』の十戒にしばしば言及している。十戒はかれの奴隷制反対の重要な論拠であった。「あなたは殺してはならない。しかるに奴隷制はその最も温和なものですら緩慢なる殺人と同じことである。あなたは盗んではならない。この掟はイスラエル人の理解によれば、人間を永久的な軛の下におく人間泥棒をもつばら禁止したものである。あなたは隣人について偽証してはならない。しかるになんびとといえど奴隷が所有できるのは、男女・子供を獣であると実質的に証言することによってである。あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべての隣人のものをむさぼってはならない。しかるに奴隷所有者はただだんにその隣人に対してこれらのものを所望するのみならず、実際上これらを盗んでいるのである」。¹⁵ 第八戒「あなたは盗んではならない」はとりわけ重視される。バーンが奴隷主をしばしば「人間泥棒」「誘拐者」呼ばわりし、「盗んできたアフリカ人の子孫」を解放するのに代償は要らないとして無償解放を要求する所以である。¹⁶

バーンの即時全面廃止思想の基礎には、あれかこれか、すべてか無かで物事を原理的に割り切ろうとする厳格な二者択一の精神が据えられて

いる。「罪に対して中くらの反対をするなどというのは馬鹿げている。ひとは盗みと正直とを結合させることなど出来ようか」¹⁷。「もしそれ（奴隷制——筆者）が一瞬たりとも正しいのなら、それは永遠に神聖である。もし不正であるというのなら、一日たりともならえさせてはならない」¹⁸。段階的・漸進的な施策をこばみ、穩健・中庸・適度を峻拒排撃するこのモデレーション拒否の精神的原理は、そのまま一八三〇年代のガリソン派に継承される重要な特徴といつてよい。

時流に抗するこのバーンの姿勢を根底から支えているのは、民意ではなく神意に従わねばならないとする非民主的な信念、つまり人間本位の立場からすれば一種倒錯した志向である。「この世の政府は神の意思をおこなう以外の目的のために樹てられているのではない」¹⁹。「神の啓示に服する者にとっては、何がもつとも得策かと問わるべきではなく、われわれの義務は何かと問わるべきである」²⁰。ひとが神よりも「人間に対する恐れ」²¹すなわち世評に心を奪われ、周囲の不興を買うのを恐れて世俗の妥協に走るとき、集団的腐敗と自己欺瞞と果てしない言い逃れが蔓延するというバーンの観察は、みずからの孤独な迫害体験に根ざしたものであり、後年トクヴィルが「多数派の専制」と呼んだあの一八三〇年代アメリカの他人指向の風潮とアポリシヨニストに対する苛酷な弾圧をいちはやく察知したものであるとして興味深い。

二

G・バーンの即時主義の提起は時期的にも状況の上からいっても、い

わば荒野の中の孤独な叫び声にすぎなかった。多数の奴隷制反対協会を創設して運動の組織化をはかり、新聞とパンフレット戦術でもって即時主義のスローガンを津々浦々にまで流布、浸透させたのは、W・L・ガリソンに代表される一八三〇年代の奴隷制廃止論者たちであった。

即時思想の展開におけるW・L・ガリソンの意義と役割りは二つに分けて考えることができる。まず第一は先駆者G・バーンの提起した即時のドグマとエートスを継承し、これを地域間抗争の激化した一八三〇年代に激情的・煽動的な言葉でもって生き生きとよみがえらせたことである。

ガリソンが最初に即時思想を打ち出したのは一八二九年九月のことである。それまでのかれは平凡なる一漸進主義者に過ぎなかった。因みに一八二九年の独立記念日にボストンのパーク・ストリート教会で行なったいわゆる「七月四日講演」の中で、ガリソンは「現在アルプス山脈よりも高くそびえ立っている機構は、もし転覆してもその廢墟に国民を埋めてしまうことのないよう、レンガを一個ずつ、一フィートずつ取り除いて低くしていかなばなりません。事業が成就するまでに幾年もの歳月が経過するかも知れません。何世代にもわたってニグロたちが手かせをかけられ傷つけられたまま、子供たちに希望を託すこともなく死んでいくかも知れません」²³と述べて、典型的な漸進主義者の言葉で事態を語っていた。ところがわずか二カ月後の『ジーニアス』（一八二九年九月二日）紙上では、あたかも回心の体験が介在したかのように路線の急転換が表明された。すなわち「利害得失の問題は正義の問題とはなんの關係もない」。世俗の打算と妥協でもって正義と当為の原則をまげることがあつ

てはならない。「利害得失の見地からしても、すべての奴隷を明日よりは今日、来年よりは来週自由にするほうが賢明である」「悪の存続に一刻たりともつともらしい弁解を許してはならない」というもので、ここで打ち出された「即時完全解放」の言葉は、周知のように『リベレーター』創刊以後アボリシヨニズムの中心的スローガンとして定着するにいたる。²⁵

後年W・フィリップスが回顧したように、この当時北部の人びとは奴隷制の存在は知ってはいても、たんにヴァージニアの生活風景の点景としてであり、政界に波風を立てるような声は囁きだに交わされはしなかった。そして北部でも「奴隷制反対の資料に染った古い教科書はすでに使用されなくなっており、新しい教科書が時代にあうように編纂されていた」。²⁶ ガリソンが最初に直面したのは奴隷制問題に対する人びとのこの根強い「無関心」と「冷淡」であり、北部の偏見は南部のそれよりも一層強固であるというあのトクヴィルも指摘することになる逆説的事態であった。²⁷

次に引く『リベレーター』創刊の辞の一節はこうした時代の趨勢に正面から立ち向かうとするガリソンのエートスを表明したものであり、これはすでにG・バーンのところで見たあのモデレーション排撃の精神と同じものである。

私は自分の言葉の激烈さに多くの人がとが反対しているのを知っている。しかしこの激烈さに理由がないとでもいうのであろうか。私は真理のように厳しく、正義のように非妥協的でありたい。この問題（奴隷制問題——筆者）に関して、私は穏当に考え、話し、書こうなどとは思わない。断じて思わない。家

屋が燃えている人に向かって、ほどほどの警告を発してやれというのによいであろう。暴漢の手から妻を救うのにほどほどにしなさいと夫に言ってやるのによいであろう。火中に落ちた赤ん坊をその母親に向かって徐々に救い出してやりなさいと言ってやるのもよからう。しかし現下の問題に関して、私にほどほどにやれなどとは決して言わないでほしい。私は真剣である。私は言葉を濁すようなことはしない。私は容赦はしない。私は一インチたりとも後退はしない。²⁸

ガリソンの即時無条件解放論は、この中間・適度・穏当を排する思考原理の具体的表現であった。「もし奴隷たちの中の何人かが売買を免ぜられるべきだというのなら、なぜすべての奴隷が免ぜられてはいけないのであろうか。もし正義が少数の奴隷の解放を要求しているというのなら、なぜ多数に関してそれがあてはまらないのであろうか」。²⁹ 要するに、すべてか無かの「山上の垂訓」の原理を地で行くこの立場にあつては、漸進的・段階的思考の入り込む余地は寸毫もない。

ガリソンの毒舌と筆鋒の激しさも、この立場に由来するものである。奴隷制反対運動に携わったばかりのまだ駆け出しの頃、ガリソンは奴隷の輸送船フランス号の船主F・トッドを奈落の底に落ちるべき追い、殺人者云々と名指しで激しく悪罵し、逆に誹毀罪で告訴されたうえ、四十九日間の投獄生活を味わう羽目になっていく。³⁰ 「他人を立腹させるには余りにも慇懃にすぎ、狂人たらんとするには余りにも醒めてしまっており、性急な方途に訴えるには余りにも思慮分別に長けすぎている」³¹ 漸進主義者に対する憤りと焦燥感、神の審判がほどなく下されるであろうとする預言者的な危機意識、これらはガリソンの文体に一種白熱した

高揚感と激情的なほとばしりを横溢させることになったといえる。

ガリソンの具体的な批判が向けられるのは、とりわけ漸進主義者が奴隷主を「環境の所産、先祖の罪の犠牲者」³²としてとらえ、奴隷制をあたかも個人責任とは無関係なもののように位置づけてしまう点である。すなわち「私が不満とするのは、かれらが奴隷制を過去の世代から相続してきたた害悪、不幸、災難ととらえて満足し、それが略奪、残虐、抑圧、海賊行為を意味する個人的犯罪だととらえていないことである。かれらは犯罪者を特定しようとしていない」³³。ガリソンはまた、南部における主人と奴隷の「関係は社会構造そのものに根ざしているのであり、その存続に対して主人は通常、奴隷と同じくらい責任をもたない」³⁴という主張にも繰り返し批判の矢をあげている。

漸進主義者のこの責任不在の論理の基底に流れているのは奴隷制相続論とも呼ぶうる論理である。ガリソンはこれを批判して、「どこかに責めを負わせねばならないことは誰にも否み難い。……（中略）……かくて責任はつぎつぎと前の世代へボールのように投げ渡され、ついにはアフリカ人の最初の導入者へと至る」³⁵と巧みな比喩で揶揄している。ガリソンはまた「この国では毎年六〇、〇〇〇人の子供たちが奴隷の両親から生まれ、救済不能な軛の下に宿命づけられている。これはアフリカ沿岸で同数のニグロを誘拐するのと同じく残忍な犯罪ではないのか」³⁶と問いかけて、奴隷制がそのオリジンにおいて不正であるのみならず、親譲りの奴隷財産を維持・増殖していくことじたいが犯罪の再生産に他ならないことを強調する。こうした即時主義の立場はそのエートスといい漸進主義批判の具体的手法といい、要するにG・バーンの姿勢をそのま

ま踏襲するものであり、バーンが一八一〇年代に打ち出した思想的原理はガリソンの煽動的な言葉によって新たな生命力を吹き込まれ、一八三〇年代に大々的に甦ったといつてよい。

即時思想の展開におけるガリソンの第二の意義は、即時のドグマの中にニグロ植民への反対論を新たに盛り込み、即時解放論と植民反対論とを表裏一体のものとして緊密に結合せしめた点にある。ほんらい即時解放の要請はけつして植民反対の立場を論理必然的に意味するものではない。むしろアメリカの場合、速やかなる解放の要請とニグロの国外駆除の願望とは現実的にも論理的にも容易に結合しえたのであって、たとえばガリソン自身についても、かれが『ジーニアス』（一八二九年九月二日）紙上で「即時完全解放」を最初に叫んだとき、じつはこの即時と並んで植民肯定論を消極的にはあるが次のように展開したのであった。

筆者ほど強い関心と真底からの満足感をこめてリベリア植民地を見守っている者はいない。私は他の箇所でこの植民地のことを、豊かな呼吸と温かい血液をたたえたアフリカの肺と心臓と名づけたことがある。しかし植民活動の足どりは緩慢かつ心許なく、国を完全に救いうるものではない。それは毒の木から数枚の葉をとりさることは出来るかも知れないが、その木を根こぎにしたり、有毒な特性を破壊しきってしまうことは出来ない。補助物として見るならば、それは奨励するに値する。しかし救済策としてはまったく不十分である。³⁸

この時点のガリソンはハイチを入植地とすれば植民事業もまた有望であると考えており、ニグロ植民の限界を充分自覚しつつもこれに対する愛着と信頼を依然捨ててさつてはいなかった。³⁹そして「私はわが人口中の

この部分（解放奴隷と自由ニグロ——筆者）の減少を促すあらゆる実行可能なプランを激励するものであるが、と同時にまた奴隷制の速やかな転覆のために永遠の正義のプリンシプルにもっぱら依拠するものでもある⁴⁰」として、要するに高邁な即時解放の理念と現実的なニグロ除去プランとの抱きあわせ路線を唱道したのであった。

しかしこれに二ヵ月先立つ一八二九年の「七月四日講演」の中で、じつはガリソンは一方で植民協会の支部増設をうながし、国会を支援して植民事業を推進するよう聴衆に呼びかけつつも、他方ではこれとまったく矛盾することに「わがニグロ人口中の大部分はわれわれの土壌で生を享けたのであり、アメリカ市民としてのすべての特権に参与する資格がある」「かれらの子供たちはわれわれと同じ生まれながらの不可譲の権利をもっている⁴²」として、ニグロの母国がアメリカであることを力説したのであった。このニグロすなわちアメリカ市民という論点を徹底させていく限り、ニグロ追い出し路線に固執しつづけることは論理的にいつて不可能である。ガリソンが『アフリカ植民に関する考察』（一八三二）をやがて公開し、植民協会をドラスティックな筆致で完膚なきまでに批判し去るにいたったのは当然であった。この『アフリカ植民に関する考察』は第一部が十章から成っており、各章に添えられた「アメリカ植民協会は」で始まる表題は章ごとの批判の概要を一応示している。因みにそれらは次の十項目であり、このフレームは以後アポリシヨニストの植民批判の定石として広く定着することになる。

- I. アメリカ植民協会は奴隷制に反対ではないと誓約している。
- II. 奴隷制と奴隷所有者の弁護をしている。
- III. 奴隷を財産だと認めている。
- IV.

奴隷価格を高騰させている。 V. 即時廃止の敵である。 VI. 恐怖と利己主義を糧にしてはぐくまれている。 VII. ニグロの完全駆除を目指している。 VIII. 自由ニグロの蔑視者である。 IX. 国内におけるニグロ向上の可能性を否定している。 X. 国民を欺き、誤った方向に導くものである。

右のVI、VIII、IXに関連することだが、ガリソンはニグロ駆除政策に対する批判と並んで、植民主義者の世論変革の姿勢の欠如にもくりかえし批判の矢を放っている。植民主義者が多数派世論の一員としてみずから偏見と差別観念の流布に一役買っておきながら、他方ではその世論に無責任に安住し、それを隠れみのにして差別の助長にまたまた手をかしているという点である。

もし自由ニグロたちが「名目的でしかない欺瞞的自由によって、よりいっそう墮落させられている」というのなら、……（中略）……現在の地位から「かれらは、たとえどんなに才能、企業心、美徳を備えていようと、決してはいあがることは出来ない」というのなら、そしてもし「アフリカにおいてのみかれらは名譽ある野望を目指して初心を追求しうる」というのなら、アメリカ植民協会こそかれらの墮落と悲惨の原因をなしているのである。なぜなら同協会はその支持者のうちにわが国でも最も影響力ある人びとを擁し、その範例が法ともいふべき圧倒的多数の賢明善良なる人びとの支持を得ていることを誇りにしているくらいだから、協会は欲しさえすれば世論に根本的な変化をひきおこすことができる立場にある。否、協会は現在世論そのものだといつてもよい。⁴³

⁴⁴ 植民批判をほとんど口にする事のなかったG・バーンとは対照的に、ガリソンはむしろそのエネルギーの大半を植民批判の作業にふりむけたのであり、一八三〇年代アポリシヨニズムはガリソンが先鞭をつ

けたこの路線に従って、即時の名の下に漸進主義と植民主義への同時批判を展開することになる。

三

即時主義が一八三〇年代アボリショニズムのスローガンとして人びとの間に浸透するにつれて、一つの問題点が次第に明確になっていった。このスローガンが即時という言葉の解釈をめぐって一つの難題を抱えているという点である。即時が字義どおり「一瞬の目をしばたく間に南部社会をその根底から覆す」⁴⁵意に解されるのでは、あまりにも荒唐無稽で非現実的な印象を与える。しかしすでに否定し尽くした漸進主義に再度逆もどりするというわけにいかないし、戦術的にも漸進主義との間には明確な一線を画す必要がある。このディレンマをどのように切り抜けるかという問題である。

即時解釈をめぐるこの問題は、じつは英米間の国情のちがいに由来していた。『アフリカ植民に関する考察』の劈頭においてガリソンが、「恐怖の制度の即時転覆をもとめることによって、わが国民に大ブリテンの人びとの範例を見習わせよう」⁴⁶と呼びかけたように、もともと一八三〇年代アメリカの即時主義の急浮上は、イギリス奴隷制反対運動の影響によるところが大であった。西インド諸島の奴隷解放を訴えたクエーカー教徒の女性E・ヘイリックの小冊子『漸進的ではなく即時の解放を』（一八二四）がイギリス世論に大きな反響をひきおこすや、海をへだてたアメリカではB・ランディがこの著作にいち早く注目し、『ジーニアス』

紙上に数回にわたって分載している。⁴⁷ また一八三〇年七月、奴隷解放をめぐるイギリス議会の大論争と、そこでの即時解放論者H・ブローガムの名演説はアメリカ人の耳目を大いにひきつけた。アメリカのアボリショニストがニューヨーク市奴隷制反対協会（一八三三年十月結成）やアメリカ奴隷制反対協会（一八三三年十二月結成）を創設して組織的活動に乗り出したのは、イギリス議会が一八三三年八月二十九日、ついに懸案の西インド諸島奴隷解放法を成立させた直後のことであった。

英米間にはしかし根本的な国情の相違が横たわっていた。イギリスの奴隷制廃止論者たちは国会で多数を制することによって植民地の奴隷制に一拳に明確な法的終止符を打つことが出来たのであり、これがイギリスにおける即時廃止の意味であった。実際の西インドの解放は、即時解放された六歳以下の子供は別として、それ以外の者には四年から六年に及ぶ「徒弟」訓練の期間が課せられたのであり、また奴隷主には二、〇〇万ポンドにおよぶ補償金が支払われるなど、その実質は漸進主義であったといつてよい。これに対してアメリカでは奴隷制は南部諸州の管轄下におかれていて、国会はこの個々の州の制度に干渉する権限は持ちあわせていなかったうえ、即時はしばしば世間一般の人びとからは、ニグロに市民的・政治的権利を賦与する文字どおり即時の完全解放と受けとられて恐れられた。イギリスのように遠隔地（植民地）での奴隷解放とちがって、ここでは奴隷制の廃止はただちに国内における深刻な人種問題の発生を意味したのであり、植民抜きなどの解放など論外とする雰囲気支配的であった。イギリスではクラークソン、ウィルバーフォース、ブローガムを初めとする政界の重鎮と大立者がこぞって即時主義を

支持し世論をリードしたのに対し、アメリカでは要路の人びとも北部一般の世論も圧倒的に漸進・植民路線に与していたのであり、即時が主流を占めることなど夢想だにしない事柄であった。⁴⁸

こうした事情から当初アメリカのアボリショニストたちは前述したディレンマ、つまり文字どおりの瞬間的な即時に固執するか、それとも漸進路線を実質的に認めて即時の旗を降ろしてしまうかという二者択一を前にして、まず最初「漸次達成さるべき即時解放」(“immediate emancipation gradually accomplished”)「即時着手さるべき漸進的解放」(“gradual emancipation immediately begun”)といった折衷的スローガンでもって苦境を切り抜けようとした。しかしこうした表現では漸進主義との差異がいまひとつ明らかでないうえ、世間からも「イギリスの外套をまとった漸進主義」などとイギリスの模倣をしはば擲揄されることになった。⁴⁹ 即時の意味解釈をめぐるこの窮境を、アボリショニストのW・ジェイは次のように述懐している。

もしかれら(アボリショニストたち——筆者)が州議会の法律による奴隷制の即時無条件廃止をとる単純なプランを提唱するならば、無謀な煽動家だといつて非難される。もしかれらが、廃止はかならずしもすべての強制労働を禁止してしまうのではなく、サント・ドミンゴの農村部の法律や西インド諸島の徒弟制度のようなものを意味しているのであれば、今度はある種の奴隷制を別の種類の奴隷制でもって置き換えようとしているのだといつて非難される。⁵⁰

即時主義のこのアポリーアに一応納得のいく解答を与えたのは、ガリソン派のアボリショニストA・A・フェルプスであった。ボストン在住

の牧師フェルプスはニューイングランド奴隷制反対協会の指導的スタッフとして組織の拡大と講演活動に挺身し、一八三四年には『奴隷制とその救済策に関する講演』を上梓して、G・バーン以来の即時主義の主要論点を集大成的に論じてみせた。次の一節は、漸進主義が義務不履行の隠れみものになっているという点を再説したものである。

それ(漸進主義のドクトリン——筆者)は現時点での解放は義務ではなく、現時点での奴隷所有こそが義務なのであり、奴隷所有はそれゆえ罪ではないと実質的に明言するものである。それは今日こういっておきながら、明日が来れば来たでやはりまた同じことを主張するのである。その翌日になっても依然同じことを主張するのである。数週間、数ヵ月、数年が経過しようとも、そのドクトリンは相変わらず同じままで、現時点での解放は義務ではなく、現時点での奴隷所有は罪ではないのである。義務と罪はつねに明日へと押しやられ、事實上、消去されてしまう。だから私はかかるドクトリンを偽りのドクトリンと断定するのである。それはどこかに罪が存することを多分認めてはいる。しかしつねに罪人のほうをかばってしまうのである。……(中略)……………

それ(漸進主義のドクトリン——筆者)は罪の責任を過去あるいは未来に投げ返し、現世代の無実を訴えかけるものである。従ってそれが、あらゆる真の悔改めと本当の改心にとって不可欠の前提条件である罪意識の覚醒など、いかにして促すことが出来よう。それはまた解放を遠い未来へと押しやり、解放をいつか将来なんらかの方法で達成されるであろう義務として語りはするが、つねに明日から義務に着手する、それも明日から徐々に着手するなどと言うのである。⁵¹

フェルプスはまた「道徳的悪」(“a moral evil”)と「自然災害」(“a

physical evil”)という対概念を設定することによって、即時主義者と漸進主義者の奴隸制把握の相違点をみごとに定式化してみせる。同時にこれは植民路線を否定する。

それ（奴隸制——筆者）を災害、不幸な制度等々として語るのは、まったく意味をなさない。そうしたやり方は奴隸制の性格を誤りつたことになる。奴隸制は神の眼からみたその真正銘の性格において、道徳的悪、罪、犯罪なのであって、ただたんに漠然とした害悪、災害、不幸などではない。そしてその制度になんらかの仕方がかかりをもっている者は、誰しも罪にかかりあっているものであって、たんなる不幸や災害に巻き込まれているのではない。……（中略）……それ（奴隸制——筆者）をたんなる自然災害として語り、対処しようとするのは、そしてたとえ道徳的悪であることを認めるにしても、過去の世代にとってのみそうであるようなものとして対処しようとするのは、まったく愚劣である。……（中略）……（ニグロの——筆者）除去や植民は、たんなる物理的処方以外の何物であろう。奴隸制のたんなる転移以外の何物であろう。⁵²

この漸進・植民批判とならんでフェルプスは、即時とは「即時悔改め」(“immediate repentance”)の謂であるという解釈を提示して、前述した即時解釈の問題に次のように解答する。

即時解放の教義の実際の経過は、社会全体としてみれば漸進的なものであるかも知れない。ちょうど即時悔改めの教義の場合と同様である。じつところ即時解放の教義は、この特定の罪（奴隸制——筆者）に即時悔改めの教義を適用することに他ならない。だからこの場合、他の場合と同様、その社会的な実際の経過は漸進的なものであるかも知れない。つまりここに一人、かしこに

一人というように神の御力が働いて実際の悔改めがなされていくのであって、一挙に社会全体の悔改めが生じるのではない。⁵³

つまり南部社会全体が一つの統一的人格であるかのように一挙に隔々まで悔改めて、南部奴隸全員の即時解放が達成されるというわけではない。即時とはあくまで個々の奴隸主の主体的決断（罪の悔改め）による個別的解放の実践の謂であって、この個人レヴェルでは解放は即時かつ全面的の形をとりうるというのである。フェルプスのこの解釈によってアポリシヨニストは奴隸解放の社会的経過としての漸進性をみとめ、過激と無謀のそしりをかわしつつも、即時の旗はなお堅持して従来の優柔不断な漸進路線を叩くことが可能になったといえるわけで、これは倫理的見地に立つ即時解釈のひとつの優れた到達点であったといえよう。⁵⁴フェルプスの示した見解は、G・バーン以来アポリシヨニストたちが押し進めてきた奴隸制把握の主体化（あるいは主観化）作業の完成を意味するものでもあった。つまり第一には、奴隸制はけっして人間の意図を越えた道徳外的な「自然災害」などではなく、個々人の主体的責任にかかわる道義上の問題であるということ。そしてこの奴隸制の道義的罪としての把握を前提としたうえで第二に、即時解放の即時とはけっして全社会的規模でのそれではなく、人間個々人の「悔改め」による個別的決断と実践にかんする事柄であるということ、こうした二重の意味での奴隸制問題の倫理化・主体化の完成である。

おわりに

南北戦争前夜の漸進・植民路線を代表するストウ夫人の小説『アンクル・トムズ・ケビン』（一八五二）を例にとつて、この作品における個人の道義責任のあつかいかたをアポリシヨニストのそれと対比させておこう。⁵⁵ 漸進主義者の奴隷制論は、道義責任の稀薄化にむかう志向性の強弱によって、大別つぎの三段階に分けることができる。(一)奴隷制を「自然災害」ととらえて、人間の一切の責任を免除してしまう立場。(二)奴隷制の「起源」は道徳的に邪悪だが、既存の制度の「存続」は正当であるとする立場。すでに見たこれらの立場に加えていまひとつ、(三)奴隷制はその起源においても存続においても非道な制度であるが、この制度下の人間には罪はないとして南部人をかばおうとする立場がある。小説『アンクル・トムズ・ケビン』はこの最後の(三)に属している。

ストウ夫人が奴隷市場における家族離別の悲惨さや大農場における不道徳な性行動を描いて、奴隷制の罪悪性、非人道性を告発したことは周知のとおりである。しかし、彼女は奴隷主の感情を傷つけたり、南部人を激怒させたりする意図は本来もちあわせてはいなかったものであつて、むしろ南部人に対してできるだけ公平善意に振舞い、かつ事を構えないよう配慮したのであつた。文学史家もよく指摘するように、ストウ夫人が比類なく残忍冷酷に描いたのはトムを拷問死させるサイモン・レグリーや神経症の女性マリー・セント・クレア等、生粋のニューイングランド人であり、慈悲深く善良な人間、親切で寛大な人びとはケンタッキーの

奴隷主シエルビーに代表されるような南部の人びとであつた。⁵⁶ 制度は徹底して残忍凶悪だが、人間は善意に満ちており罪はないとするのが『アンクル・トムズ・ケビン』のモチーフであり、作者の信念であつたといえる。

逃亡奴隷取締法制定直後の南北の感情対立がもつとも陰悪化した時期に書かれたこの作品ですら、奴隷主の道義責任は要するに免除されているのであり、漸進主義思想が個人レヴェルにまでその非難の矛先を向けて道義論を尖鋭化させていくことは決してなかったといつてよい。即時主義者アポリシヨニストの場合はこれとは対照的である。かれらの思考方法の最大の特徴はその徹底した個人倫理的・内面的発想に——つまり裏からいえば徹底した制度的・政治的観点の欠如に——あつたのであり、G・バーンというアポリシヨニストが執拗なまでに繰り返して告発しつづけたのは他でもない、状況の不可避性を口実として個人責任の領域を極小にもつていこうとする社会風潮、別言すれば、「因果性の意識が増大するにつれて、道義の領域の外延は縮小していく」という⁵⁷アフォリズムを地で行く漸進主義思想の倫理的欺瞞性であつたといえる。

付記。この小論は神戸女学院大学研究所の研究助成金の成果である。

註

- 1 ガリソンの片腕をつとめたアポリシヨニストのO・ジョンソンは一八七九年に著したそのガリソン伝序文の中で、ガリソンこそは「即時無条件解放の旗を掲げ、その原理の上に運動を組織した最初の人物」であつたと位置づけている。またA・H・グリムケも十九世紀末に著したガリソン伝の中で、ガリソンを「全面即時廃止」の化身」と表現し、即時主義の教義の「化肉」(incarnation)はガリソンをまづ初めて達成されたと叙べている。要するにこうした把握はすでに十九世紀後半から定着していたとみづかふ。Oliver Johnson, *William Lloyd Garrison and His Times, or, Sketches of the Anti-Slavery Movement in America, and of the Man Who was its Founder and Moral Leader*. (Boston, 1879), p. vi.; Archibald H. Grimké, *William Lloyd Garrison The Abolitionist*. (New York, 1891. reprinted in New York, 1969), p. 109.
- 2 イギリスの国会とアメリカの連邦議会はともに一八〇七年三月に奴隷貿易の禁止を可決し、この法律は翌年から実施された。奴隷制強化の風潮についてはバーン自身がその著作の中で具体的に指摘している。ヴァージニア州では一八〇四年の法律によって、ニグロが開く夜の集会は宗教的つごいも含めてすべて禁止され、違反者は鞭打ち刑等によって厳しく罰せられることになった。翌年にはニグロの子供に読み、書き、算術を教えることが禁止されている。また南部の州議会の中には安易な奴隷解放に歯止めをかける州も出はじめた。George Bourne, *The Book and Slavery Irreconcilable. With Animadversions upon Dr. Smith's Philosophy*. (Philadelphia, 1816. reprinted in New York, 1969), pp. 42, 46, 133.
- 3 バーンは建国の父祖たちが一方でイギリスの暴君を容赦なく攻撃しつつも、他方では奴隷貿易と奴隷制を容認した点をこの上ない偽善的態度として著作の中で繰り返し衝いてゐる。Ibid., pp. 37, 66.
- 4 Ibid., p. 76. この距離的隔たりにもたれかかる心理の発生は、一八〇七年に奴隷貿易が禁止され、一応新たな捕獲奴隷が直接アフリカから輸入されることなくったという状況に一部起因していたといえよう。
- 5 Ibid., pp. 24—25. ここに引いたバーンの言葉の前半を、一八三〇年代アポリシヨニズムの指導者W・L・ガリソンは『アフリカ植民に関する考察』の中でそのまま引用している。ガリソンはこうした出典を明記してはいないが、かれの著作にはバーンからの引用がいくつもあり、言葉の上でも思想の上でも直接的に影響を受けていることがうかがえる。William L. Garrison, *Thoughts on African Colonization*. (Boston, 1832. reprinted in New York, 1968), Part I, p. 90.
- 6 Bourne, *op. cit.*, p. 70.
- 7 Ibid., p. 76. バーンはこの同じ頁で、ひとはホーキンスの一団が三〇〇年まえアフリカ沿岸でニグロ泥棒を働いたなどと嚴厲な顔をしているが、ホーキンスの時代以来ここアメリカで数世代にわたって同じ悪業を重ねてきた奴隷主は無罪だともいふのかと、同じような批判を同じような口ぶりでもまた繰り返している。
- 8 G. B. Stebbins, *Facts and Opinions Touching the Real Origin, Character, and Influence of the American Colonization Society*. (Boston, 1853. reprinted in New York, 1969), pp. 51—52.
- 9 Bourne, *op. cit.*, pp. 10, 20, 38, 52. この時期、聖職者や敬虔なクリスチャンが奴隷制問題に対して“a predominant insensibility”や“cool indifference”を示し、奴隷制の批判者に暗黙の脅しをかけ沈黙させようとする雰囲気濃厚にあったことがバーンの叙述からうかがえる。
- 10 奴隷制の最も頑固な支持者は福音の説教師と教会役員であると叙べたあとで、バーンはこう言っている。Ibid., pp. 8—9.
- 11 Quoted in Ibid., p. 144. (バーンの『聖書と奴隷制は両立せず』には一四一頁からなる本論の末尾に十数頁のS・S・スミス批判が添えられているが、このスミス批判の部分には頁数がうたれていない。従って以下本稿で引用する一四二頁以後の頁数は筆者が便宜上うった続きの通し番号である。)
- 12 Ibid., pp. 144—145.
- 13 Ibid., p. 152.
- 14 Ibid., p. 107.
- 15 Ibid., p. 80.

- 16 "the eighth commandment"に言及した箇所としては、たとえば *Ibid.*, pp. 23, 70, 73, 80, 98 を参照。"Man-thief" "Man-stealer" "Negro-stealer" "Kidnapper"と云った表現は到るところに頻出する。無償解放の思想については、たとえば *Ibid.*, pp. 56, 132, 137 を参照。バーンはまた即時主義の一環として、教会からの奴隷主や奴隷商人の「即時追放」("immediate expulsion")を要求し、奴隷主をキリスト教徒として認めるべきではないと力説している (*Ibid.*, p. 139)。
- 17 *Ibid.*, p. 4.
- 18 奴隷制は完全に腐敗しているので「全面即時廃止」以外に治癒すべき方法はない。「漸進的解放」では奴隷制の正当性を実質的に認めることになる、という言葉のあとにこの言葉が続く。 *Ibid.*, p. 153.
- 19 *Ibid.*, p. 67. バーンはこれにすぐ続く頁で、不正はいかに正規の手続きをふみ多数派の支持をえていようと、地上の政府の法律によつては正当化されない旨を強調している。"terrestrial government"に対して"divine will"を対置し、後者を上位におくこの発想は、マス・デモクラシーの横暴に抗する一八三〇年代アポリシヨニストのエートスとして継承されることになる。
- 20 *Ibid.*, p. 153.
- 21 バーンは聖職者一般の「ススキスの他人指向の氣質を論難した箇所」で "that fear of man which bringeth a snare" という表現を用いている (*Ibid.*, pp. 12, 154)。この表現はガリソンの印象にも強く残ったらしく、「リベレーター」創刊の辞の中でそのまま引用されることになる。 Wendell P. Garrison and Francis J. Garrison, *William Lloyd Garrison 1805—1879. The Story of His Life Told by His Children*. (New York, 1885, reprinted in New York, 1969), vol. I, p. 225.
- 22 Bourne, *op. cit.*, pp. 13, 139—140. ここで "the menace of worldly displeasure" に屈服して奴隷解放への行動と決断を明日へ明日へと無限にひきのける "mass of corruption" を生みはぐくむ風潮をバーンはこれらの頁ではとくに激情をこめて集中的に批判している。
- 23 W. P. Garrison and F. J. Garrison, *op. cit.*, vol. I, p. 135.
- 24 *Ibid.*, p. 143. このように "expediency" と "right" あるいは世俗の法と神の法を対置する発想は一八三〇年代のガリソン派アポリシヨニストの特徴ともなる。
- 25 ガリソンは即時主義の標語を「ジーニアス」紙(一八二九年九月二日)では "immediate and complete emancipation" という言葉で、また「リベレーター」創刊号(一八三一年一月一日)では "immediate enfranchisement of our slave population" という言葉で、そしてアメリカ奴隷制反対協会の「所信の宣言」(一八三三年十二月六日)では "immediate and general emancipation" あるが "immediate and total abolition" という言葉で表現している。 *Ibid.*, pp. 143, 225, 411.
- 26 先述したの、バーンは奴隷制が人間の意思から独立した災害ではなく道義的罪であることを強調して、奴隷制の位置づけ方のうえで先駆的な役割りを果たしたのであるが、バーンは解放の即時性をそれほど強調したわけではなかった。因みに本稿でとりあげたバーンの著作の中で即時という言葉が使用されているのは "immediate and total abolition" (Bourne, *op. cit.*, p. 19), "slavery would immediately expire" (p. 101), "immediate and universal emancipation" (p. 120) と云った数カ所にすぎない。解放の即時性が本格的に強調されるのはやはりガリソンの「リベレーター」以後のことである。
- 27 Wendell Phillips, *Speeches, Lectures, and Letters*. (Originally published in 1884 by Lee and Shepard, reprinted in New York, 1968), p. 148.
- 28すでにガリソンはバーク・ストリート教会での「七月四日講演」(一八二九年)の中で、「北部の偏見は南部の偏見よりも強固です。それは銃剣のように奴隷たちに突き刺さっており、これが国家の鎖を鍛造しつぎとめてくるのです」と表現している。「リベレーター」創刊号の中では「世論の一大革命」は北部自由州とりわけニューイングランドにおいてなされるべからぬことを説き、その理由として、ここでは奴隷主の間におけるよりも「誹謗はより仮借なく、偏見はより強固で、アバシーはより冷淡」であることを、つまり北部における強固な "public indifference" を強調している。 W. P. Garrison and F. J. Garrison, *op. cit.*, pp. 134, 224.
- 29 時流に抗するの、バーンの非民主的な姿勢についてはすでに触れたとお

りであるが、この姿勢は一八三〇年代のアポリシヨニストによってそのまま継承されることとなる。たとえばガリソンはジャクソニアン・デモクラシーの開始期に次のような発言を残している。「多数派は間違ったことをしでかすはありますが、主と主張するのが共和主義なのでありましょうか。そうだとしますと、私は共和主義者ではありません。人民は時折りふとときにもかれらに託された厚い信頼を悪用することがあると主張するのが貴族主義なのでありましょうか。そうだとしますと私は貴族主義者であります」(一八二九年バーク・ストリート教会での「七月四日講演」。*Ibid.*, p. 128)。マス・デモクラシー下の「多数派の専制」に対するアポリシヨニストの拮抗力はこの一種の人民不信の思想に支えられているのであり、この問題についてはまた他日稿を改めて取り上げたい。

Ibid., p. 225. 下に引用した文章の中でガリソンがくりかえし否定しているのは要するに適度・中庸という概念であり、「moderation」という言葉をかればこの数行の文中でそれを繰り返しかえし何度も使用している。またガリソンのこの文章はG・バーンの著作に出てくる似たような調子の文章、たとえば「They call themselves moderate men; but upon this subject, I neither feel, nor desire to feel, any thing like the sentiment of moderation.」³²「Upon this subject, I neither feel, nor desire to feel, any thing like moderation. We are accused of enthusiasm. as long as I have a voice to speak, this question shall never be at an end.」³³をただちに想起させるのであり、こうした文体や語法の点でもバーンの著作はガリソンに多大なインスピレーションを与えているといつてよい。*Bourne, op. cit.*, pp. 4, 20.

29 W. L. Garrison, *op. cit.*, p. 79. 一定の期日を定めて、それ以後生まれた子供は自由にすべしという解放プランに関しては、ガリソンはそれは罪の続行の黙認であるのみならず、生まれた日付の一日ちがいでも同じ兄弟の境遇が自由と奴隷に岐れるというのは没義道であるとして矢張り一蹴している。*Ibid.*, pp. 90—91.

30 これは奴隷交易の中心地バルティモアで、B・ランディと組んで「ジーニアス」紙を発行していた頃のことである。ガリソンがことさらにトッドを

取りあげたのは、この人物がガリソンと同じマサチューセッツ州ニューベリーポートの出身だったことによる。奴隷交易にたずさわる船舶所有者の多くがニューイングランド人だということの発見は、ガリソンの怒りに油をそそいだようだ。トッドを誹謗した中でガリソンは、アフリカ沿岸では厳罰をもって禁止されている奴隷の交易がなぜわが国の沿岸では許されているのか、かかる区別は不合理ではないか、と論じている。W. P. Garrison and F. J. Garrison, *op. cit.*, pp. 165—166. この誹謗事件で投獄(一八三〇年四月七日—六月五日)されたのち、ガリソンはボストンに帰って『リベレーター』を創刊することになる。

31 W. L. Garrison, *op. cit.*, p. 54. ガリソンの預言者的な口調についてはたとえば *Ibid.*, p. 20 の文体を参照。ここでガリソンは「the tide of moral death」³⁴「the fire of God's indignation」³⁵といった言葉を用いて危機感を集中的に表明している。

32 Grimke, *op. cit.*, p. 118.

33 W. L. Garrison, *op. cit.*, p. 20. また別の箇所でもガリソンは、植民主義者(漸進主義者)は奴隷制を「疫病や飢饉の流行と同様、われわれがその存在に対して責めを負ういわれの無い、この国の相続した悪」としてしか捉えていないと同じような批判をくりかえしている。*Ibid.*, p. 53.

34 この種の弁明の事例をガリソンは *Ibid.*, pp. 62—63 で集中的にいくつも引用している。

35 *Ibid.*, p. 90. この同じ頁でガリソンは、現世代の奴隷主は奴隷制の「オリジン」に対して責任はないではないかという言い逃れを取り上げて、私は現在の奴隷主をその祖先の罪ゆえにとがめ立てしようとしているのではない、かれらが同じ罪をたえまなく犯し拡大していることを糾弾しているのだと切りかえている。奴隷制相続論とそれに対するガリソンの批判については *Ibid.*, pp. 13, 20, 62—63 も参照。

36 *Ibid.*, p. 90.

37 David B. Davis, "The Emergence of Immediateism in British and American Antislavery Thought," *The Mississippi Valley Historical Review*, XLIX (1962), pp. 223—224. 下にデーヴィスは一八〇五年の Thomas

Branagan' 一八一七年の John Kenrick' 一八二五年の Samuel M. Worcester らの著作にみられる "immediatism" と "colonization" との思想的結合の事例を紹介している。

38 W. P. Garrison and F. J. Garrison, *op. cit.*, p. 142.

39 *Ibid.*, p. 143. 他方でガリソンは「わがニグロ人口の大部分はアメリカの土壌で生を享けたのであるから、かれらはみずからの居住地を随意に選ぶべきであり、われわれには強制手段を使ってかれらを除去する権利などなく」とも叙べている。 *Ibid.*, p. 144.

40 *Ibid.*, p. 143. へに引いた "feasible plan" (ニグロ駆除) の支持と "eternal principles of justice" (奴隷制即時廃止) への依拠を while という接続詞でつないだ文章は過渡期ガリソンの折衷的立場をみごとにあらわしている。ここには現実の成否や実行可能性を度外視して、原理のみを貫徹しようとするあの『リベレーター』以後前面に出てくる態度はまだない。

41 *Ibid.*, p. 137.

42 *Ibid.*, p. 131. ここで取り上げている一八二九年の「七月四日講演」と同年九月二日付の『ジーニアス』紙は、過渡期ガリソンの思想を検討するうえできわめて重要な史料である。すでに見たように「七月四日講演」においてはガリソンは典型的な漸進的解放論を口にしていたが、九月二日の『ジーニアス』紙では「即時完全解放」へと急転換し、これがそのまま『リベレーター』創刊号（一八三一年一月一日）へと受けつがれる。他方、ニグロ植民のイッシューに関していえば「七月四日講演」も『ジーニアス』紙もともに及び腰の支持を打ち出しているのであり、植民が大々的に排撃されるにいたるのは「アフリカ植民に関する考察」（一八三二年）においてである。したがって、即時解放と植民反対というこの二つの標語が同時に掲げられる最初の公式文書は『リベレーター』創刊号ではなく、アメリカ奴隷制反対協会の「所信の宣言」（一八三三年十二月六日）ということになる。

43 W. L. Garrison, *op. cit.*, p. 150.

44 アメリカ植民協会が創設されたのは、バーンの『聖書と奴隷制は両立せず』（一八一六）が出たのと同じ年の暮れのこと、協会自体がまだ存在

しなかったわけだから、バーンにガリソンのような植民協会批判を期待するのはそれこそないものねだりということになる。しかし、もしバーンにその気があれば、当時大量に出回っていた植民思想を批判することは充分出来たはずであるが、バーンはこれをも全然行なっていない。『聖書と奴隷制は両立せず』の中でかれは「一カ所、それも註の中で植民に言及しているが、これは批判というよりも、植民事業が實際上 "impracticable" であるというもので、植民の思想や原理を否定しているわけではない (Bourne, *op. cit.*, p. 134 n. 32)」。ガリソンはこれと対照的に、数多の一八三〇年代アポリシヨニストの中でも植民思想と植民協会批判に関しては文字どおり最大の立役者であり功労者であったといつてよい。

45 John L. Thomas, ed., *Slavery Attached : The Abolitionist Crusade*. (New Jersey, 1965), p. 16.

46 W. L. Garrison, *op. cit.*, Preface. (この序文、わずか二頁のせいか頁数はうたれていない)。即時主義の起源を英米いずれにもとめるかという大きな問題は一応措くとして、当時のアメリカ人たとえば D・クリスティなども「綿花は王者なり」と題する論稿の中で、一八三〇年代アメリカにおける即時主義の台頭をイギリスの影響に帰す見解を示している。つまりアンテ・ペラムのアメリカ人自身、この点に関するイギリスの影響については自認していたと云つてよい。 E. N. Elliott, ed., *Cotton Is King, and Pro-Slavery Arguments : Comprising the Writings of Hammond, Harper, Christy, Stringfellow, Hodge, Bledsoe, and Cartwright, on This Important Subject*. (Augusta, 1860, reprinted in New York, 1968), p. 52.

47 Merton L. Dillon, *Benjamin Lundy and the Struggle for Negro Freedom*. (Urbana, 1966), p. 148.

48 イギリスの国会とちがってアメリカの連邦議会には南部諸州の奴隷制に干渉する権限はないということ、従って全国一斉の奴隷制廃止はきわめてむずかしいということは、アポリシヨニストも充分認識していた。因みにアメリカ奴隷制反対協会の Constitution は Article 2 ですでにこの点に言及している。 William Jay, *Inquiry into the Character and Tendency of the American Colonization, and American Anti-Slavery Societies*. (Originally pub-

ished in 1838 by R. G. Williams, reprinted in New York, 1969), p. 127.

イギリスでは著名な指導的ひとびとが即時主義を唱えたのに対し、アメリカではそうした著名人はすべて植民路線を支持したのであり、アポリシヨニズムに走ったのは少数のかつ知名度の低い人びとにすぎなかった。アポリシヨニストのO・ジョンソン自身、そのガリソン伝の中でこうした点を繰り返しかつきわめて具体的に詳論している。Johnson, *op. cit.*, pp. 87, 90, 98, 117.

49 Gilbert Hobbs Barnes, *The Antislavery Impulse, 1830—1844*, (c. 1933, reprinted in Gloucester, 1957), pp. 60—61, 66—67, 104.

50 Jay, *op. cit.*, p. 197.

51 William H. Pease and Jane H. Pease, eds., *The Antislavery Argument*, (The Bobbs-Merrill Company, INC., 1965), pp. 73—74.

52 *Ibid.*, p. 77.

53 *Ibid.*, p. 72.

54 アポリシヨニストのように宗教的心情で動く活動家のばあい、奴隷解放を論じるに際して「悔改め」あるいは「即時悔改め」という言葉を口にするのはごく自然なことであるといえる。すでにG・バーンも「聖書と奴隷制は両立せず」(一八二六)の中で「repent」あるいは「repentance」という言葉を使っているし(Bourne, *op. cit.*, pp. 86—87, 136)ガリソンの起草したアメリカ奴隷制反対協会の「所信の宣言」(一八三三)の中にも「the abolition of slavery by the spirit of repentance」, 「repent instantly」, 「speedy repentance」といった表現が各所に出てくる(W. P. Garrison and F. J. Garrison, *op. cit.*, pp. 409, 412)。(ガリソンの片腕であったO・ジョンソンによれば、ガリソンはこの即時悔改めの教義を、典型的な漸進・植民主義者ともいふべき例のL・ビーチャーから学んだということであり、即時悔改めの言葉じたいは当時宗教家のあいだでかなり出回っていたのかも知れない。Johnson, *op. cit.*, p. 45)。またE・ライト・ジュニアもその「奴隷制の罪とその救済策」(一八三三)の中で「immediate instant abolition」の無謀性の非難にこたえる形で「immediate, entire repentance」を論じている(Thomas, ed., *op. cit.*, p. 16)。しかしバーンやガリソンの場合はいず

れも、フェルプスのように即時解釈にまつわるディレンマの解決を意図した明確な方法意識の下で即時悔改めの概念を提示しているのでは全然ないし、またライトの場合は一見フェルプスと似たようなことを叙べているようで、論理的にはまったく不十分なことしか叙べていない。個人レヴェルでの即時性(即時悔改めによる即時解放)と、全社会レヴェルでの漸進性を区分し、即時を個人主体にのみ関連づけることによって解釈上のディレンマを切り抜けたのはやはりフェルプスの功績であったといえよう。

ボストンのバイン・ストリート教会の牧師であったフェルプスは一八三三年四月、奴隷制の罪と即時悔改めの教義にかんする一連の講演をおこなった。この講演は翌年ニューイングランド奴隷制反対協会の手で「奴隷制とその救済策に関する講演」と題して出版された(Anne C. Loveland, "Evangelicalism and 'Immediate Emancipation' in American Antislavery Thought," *Journal of Southern History*, XXXII (1966), p. 174 n. 6)。史家G・H・バーンズはその古典的名著 *Antislavery Impulse* の中で、即時解釈にまつわるディレンマを解決したのは「Lane debate」(一八三四年二月)以後T・ウェルドの影響下にアポリシヨニズムへと転身したレーン神学校の反逆学生たち('Lane rebels')であったとしているが、これはやはりボストンのガリソン派の役割りを過小評価したものである。年代格的にいってフェルプスの講演のほうが「Lane debate」より早いというだけでなく、思想内容の上からいっても即時悔改めの教義はすでにフェルプスのほうに完成した形で現われているといふべきである。Barnes, *op. cit.*, pp. 100—104.

55 ストウ夫人は『国民時代』に『アンクル・トムズ・ケビン』を連載した際、この物語の最後に書き添えた一文の中で、「とくに、この物語をずっと聞いていくくださった小さい皆さんに作者は心からの愛を捧げます。小さい皆さん、皆さんはいつか大きくたって立派なおとなになります。それで作者はお願ひするのですが、どうかこの物語から学んだことをいつまでも忘れずに、かわいそうな、しいたげられた人びとを憐れんでやってください。そして皆さんが大きくなったら、こういう人びとのために、できる限りのことをして皆さんの憐れみの心を実際に見せてあげて下さい」

云々と叙べたのであった(チャールズ・エドワード・ストウ(鈴木茂々子訳)『ストウ夫人の肖像 その手記による伝記』(ヨルダン社、一九八四)、一七九頁。山屋・大久保訳『アンクル・トムズ・ケビン』(角川文庫、一九六六)、下巻、四五九―四六〇頁、大久保氏の解説参照)。つまりストウ夫人が主として念頭において呼びかけ希望を託したのは未来の世代を担う子供たちであって、現世代の南部奴隷主に直接呼びかけたわけでもなければ、ましてや「即時解放」を叫んだわけでもなかった。こうした意味で彼女は父親の大ビーターチャーと同様、典型的な漸進(かつ植民)主義者であったといえる。

こういった点を指摘したものとしてはたとえば、ロバート・B・ダウンス(齋藤光・本間長世・ほか訳)『アメリカを変えた本』(研究社、一九七二)、一五六頁を参照。ここでダウンスが引いているジョエル・チャンドラー・ハリスの言葉、つまりストウ夫人の「本のなかのすべての卓越した美しい人物たち——アンクル・トム、少女エヴァ、最愛の主人、その他——は、この本の主題が常に非難し続けている制度そのものの産物」に他ならないという指摘は、ストウ夫人の立場(奴隷制度の弾劾と南部の人びとへの寛大さないし好感の共存)の一端を的確にとらえたものというべきである。そして他ならぬストウ夫人自身『アンクル・トムズ・ケビン』の末尾で「作者は、多くの場合において、南部の人々の、各個人を特色づけているあの気高さ、寛大さ、慈悲深さに対しても公平を期しえたものと希望している」と述べたのであった。山屋・大久保訳、前掲書、下巻、四三九頁。

南部人に罪はない、少なくとも奴隷制の「起源」に対して罪はないとする発言はリンカーンにもよく見られるもので、たとえば有名なベオリアでの演説(一八五四年十月十六日)の中では、「私は奴隷制それ自体の途方もない不正ゆえにこの制度を憎みます」と述べつつも、他方では「私は南部の人びとが、われわれは奴隷制の起源に対して、あなたがた以上に何の責任も持っていないという時、私はその事実を認めます」と述べ、南部人と同じ状況におかれたら北部人も奴隷制に対して同じような態度をとるであろうとしている。イギリス原罪論や相続論の論理でもって南部人の免罪をはかろうとする感情は一八五〇年代の北部にも依然根強く残って

いたことが分る。Roy P. Basler, ed., *The Collected Works of Abraham Lincoln*, (New Brunswick, 1953), vol. II, p. 255.
Friedrich Nietzsche, *Sämtliche Werke*, (Kritische Studienausgabe) München/Berlin, 1980, Band 3, S. 24.

原稿受理 一九八七年四月十日